

景気循環論における「定常過程の理論」の意義

著者	瀬尾 崇
著者別表示	Seo Takashi
雑誌名	金沢大学経済論集
巻	41
号	2
ページ	109-129
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00061725



景気循環論における「定常過程の理論」の意義

瀬 尾 崇

- I はじめに
- II 「シュンペーターのパラドックス」再考
 - II. 1 ワルラスとシュンペーター
 - II. 2 『経済発展の理論』「日本語版への序文」(1937年)の再検討
 - II. 3 中山伊知郎の「純粋経済学」
- III 定常過程と発展過程の相互連関としての景気循環
 - III. 1 『景気循環論』に対するS.クズネッツの書評をめぐって
 - III. 2 定常過程と発展過程の相互連関
 - III. 3 「均衡の近傍」の理論的意義
- IV まとめ

I はじめに

シュンペーター没後70年にあたり、本論文では、シュンペーターの経済理論体系において、従来から議論されてきた定番のテーマでありながら、いまなお再考する意義があると考えられるテーマを取り上げる。それは、Louçã (1997)で「シュンペーターのパラドックス (“Schumpeter’s Paradox”）」と呼ばれる、ワルラスの一般均衡理論に対するシュンペーターのスタンスに関するパラドックスのことである¹⁾。シュンペーターの経済理論体系が、ワルラスとマルクスの二大巨人にそれぞれ大きく影響を受けた静態論と動態論を支柱とする二分法的構造になっていることは周知の通りである²⁾。この理論体系に対して、これまで、新結合の遂行(広義のイノベーション)を軸とした動態論の方に焦点があてられ、評価されてきたのに対し、静態論の方は批判が多く、シュンペーターの理論体系における位置づけという観点から適切に評価されてこなかったように思われる。その際たる例が³⁾、シュンペーターに

とって生涯の二大研究テーマの一つとされる景気循環論である³⁾。

本論文では、シュンペーターの生涯において、静態論から動態論へ、そしてそれらを統合した景気循環論へと、いわば以前の研究成果がそれに続く研究成果の中に「化学」的に融合されていくような連続性を認めたいうえで、景気循環論における静態論の位置づけと意義について再考する。その際、シュンペーターが景気循環過程における均衡を「循環的フロー」あるいは「定常状態」と呼び、さらに「均衡の近傍」というワルラスの一般均衡理論にはないシュンペーター独自の概念を提示したことに焦点をあてる。

論文の構成は以下の通りである。第Ⅱ節では、「シュンペーターのパラドックス」に関して、シュンペーターがワルラスの一般均衡理論をどのように受容し、それがシュンペーターの経済理論体系にどのように位置づけられたのか、先行研究を踏まえながら再確認する。第Ⅲ節では、シュンペーターの景気循環理論において、定常過程の理論（静態論）と発展過程の理論（動態論）が、どのように相互に関連づけられ、とりわけ後者に前者がどのように「化学」的に融合されているのかを考察する。第Ⅳ節で本論文の全体を総括する。

Ⅱ 「シュンペーターのパラドックス」再考

Rosenberg (1994) は、シュンペーターを20世紀の経済学における最も急進的な経済学者として高く評価した。そこでは、シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』(1942年)と『経済発展の理論』の「日本語版への序文」(1937年)に依拠しながら、技術変化や制度変化を「他の事情が同じならば (*ceteris paribus*)」という条件に押し込めて合理的意思決定と均衡に分析を単純化する新古典派理論に対する批判者としてシュンペーターを位置づけている。仮にRosenbergに従うなら、真に問われるべきは、なぜシュンペーターは新古典派パラダイムと決別したのか、ということになるだろう。しかし、実際、シュンペーターは、経済理論に関連する著作において均衡理論の枠組みに固執し続けている。このような均衡理論に対する批判者であると同時にその受容者でもあるというシュンペーターの二面性のことを、Louçã (1997) は「シュンペーターのパラドックス」と表現している。

この「シュンペーターのパラドックス」の解釈をめぐって、これまでの先行研究でも繰り返し検討が重ねられてきた。ワルラスとシュンペーターの学史的関係、静態論と動態論の二分法に対する評価など、いずれもこれまで多くの研究成果が蓄積されてきた、いわば定番のテーマである。本節では改めて、シュンペーターによるワルラスの一般均衡理論の受容態度について再検討する。

II. 1 ワルラスとシュンペーター

ウィーン大学での学生時代、シュンペーターは、一方で、限界主義の立役者の一人であるカール・メンガーの薫陶を受けたヴィーザーとベーム＝バヴェルクの二人の師のもと、自然と一般均衡理論へとつながっていくような学究的環境の中で経済学を学んだ⁴⁾。他方、当時のドイツ語圏の経済学はベルリンを中心とするドイツ歴史学派の影響力の下にあり、シュンペーターは歴史学派からも大きな影響を受けていた⁵⁾。19世紀末に、論理的・演繹的方法に立って理論構築を重視するオーストリア学派のカール・メンガーと、経験的・帰納的方法に立って資料収集を重視する歴史学派のグスタフ・シュモラーとの間で展開された「方法論争」に直面し、この論争の不毛さを痛感したシュンペーターは、その後、主にマッハ流の「道具主義」とシュモラー流の「歴史的記述の科学化」を明確に認識するに至った。前者に関して、マッハ流の道具主義とは、理論を現実の記述ではなく、観察対象となる現象を分類し、組織化し、説明し、予測し、なんらかの有益な結果を導出するための道具であって、理論それ自身は真でも偽でもないと主張する立場のことである⁶⁾。また、後者に関して、歴史を視野に入れるということは、「他の事情が同じであれば」という孤立化の前提を許さないということである。シュンペーターは、歴史あるいは経済史を、経済学の四つの主な分析道具（理論、統計、歴史、経済社会学）の中で最も重要なものと考えていた⁷⁾。なぜなら、「歴史的な記録は本来純粹に経済的たりえず、当然そのなかに純粹経済的でない『制度的』な事実をも反映せざるをえないものである。したがってそれは経済的事実と非経済的事実とが相互にいかに関連しているか、また各種の社会科学が相互にいかに関連すべきかを理解する最善の方法を供する⁸⁾」からであ

る。したがって、理論はつねに歴史的背景によって立つものでなければならず、単に理論の検証や例証に機械的に使用されるのではなく、化学的に融合されていなければならないのである。

このように、若きシュンペーターは、オーストリア学派から限界主義に基づく均衡理論を、ドイツ歴史学派から歴史と理論の化学的融合を学び取った。それから20歳代の「聖なる多産の10年間⁹⁾」で、シュンペーターの経済理論体系の基本的枠組みは、概ね構築された。シュンペーターの経済理論体系は、経済静学と経済動学、そしてそこに社会的・文化的側面を加味した経済社会学によって完成される壮大な体系である。このシュンペーター理論の形成過程の出発点に位置づけられる経済静学に最も大きな影響を与えた先人がワルラスである。周知のように、シュンペーターは著作の至るところで、晩年までワルラスの功績にしばしば言及している。

ワルラスの名を不朽にするものは経済均衡の理論、すなわち、その結晶のように透明な論旨が純経済関係の構造を一個の根本原理をもって照明する、あの偉大な理論である。(Schumpeter (1952), 邦訳書112頁)

純粹経済学に関するかぎり、私の意見ではワルラスがあらゆる経済学者のなかでももっとも偉大な者であろう。彼の経済均衡の体系は、現に見られるように、「革命的」な独創という特質と古典的な総合という特質とを一体としたものであつて、経済学者による著作のなかでは、理論物理学の成果との比較に堪えうる唯一のものである。……ワルラスの業績は厳密ないしは精密科学に達しようとする経済学の旅程に聳え立つ里程碑であり、今日では流行遅れになったとはいえ、なお現代の最良の理論的著作の多くのものの背後に立っているのである。(Schumpeter (1954), 邦訳書(下) 146頁)

これらで言及されているワルラスの業績とは、言うまでもなく、交換の一般均衡、生産の一般均衡、資本形成および信用の一般均衡、流通および貨幣の一般均衡の四つの特殊均衡(部分均衡)を経済システムのうちに含みなが

ら、経済システム全体にわたって成立する一般均衡理論のことである。この社会全体の一般均衡は、経済社会を実際の応用における有用性や道徳的な価値判断からは独立に形式化・抽象化させて考え、そこで意味をもつ経済的契機の全体を、相互に関連しあった均衡体系として構成された。ワルラス自身は、一般均衡理論を「純粋経済学」と呼び、それは「本質的には完全な自由競争を仮定した制度のもとにおける価格決定の理論である¹⁰⁾」と考えていた。具体的には、経済社会をいわば一つの巨大な株式市場のようなものと想定したうえで、三種類の資本(土地、労働力、機械)の所有者(地主、労働者、資本家)と、第四の経済主体である企業家が、完全競争的な市場における交換において、需要者と供給者が相互に価格をオファーしながら、双方が欲望の最大満足を得られる一致点で価格が決定されるような理論である。

シュンペーターにとって、ワルラスの一般均衡理論は、シュンペーターの経済静学に大きく関わるもの、あるいは経済静学そのものとして、大きく影響を与えたことは従来の研究も踏まえて間違いないだろう。しかし、経済静学はシュンペーターが目指す経済理論体系の構成要素の一部でしかなく、他の構成要素である経済動学と経済社会学との関係を考慮したとき、問われるべきは次のような問いである。シュンペーターはワルラスの一般均衡理論をそのままの形ですべて受容したのか。あるいは、ワルラスの一般均衡理論を自身の経済動学(さらに経済社会学)との接続・融合に際して調整を加えたのか。

II. 2 『経済発展の理論』「日本語版への序文」(1937年)¹¹⁾の再検討

このような問いに取り組むうえで、いま一度注目すべきは、『経済発展の理論』の「日本語版への序文」(1937年)である。シュンペーターが同書で構築しようとしたのは、「時の経過につれて生じる経済変化の過程についての理論的なモデル」(邦訳書(2020), 19頁)である。多くの先行研究で言及されてきたように、この理論モデルの構築にあたって、シュンペーターは経済静学と経済動学との二分法的接近を採用し、その際、ワルラスとマルクスの二人の先人に大きく影響を受けている。この序文においてワルラスに関する記述は、「私たちはワルラスに、経済システム概念と経済諸量の相互依存に関

する純粋な論理を経済学史上はじめてまとめ上げた理論装置を負っている」(同上)という賛辞から始まる。見逃してはならないのは、それに続く箇所である。

しかしながら、私は、ワルラスの概念と彼が利用した技法……の研究を始めた当初から、そうした概念や技法が厳密に静学的な性質のものである……だけでなく、定常過程にしか応用できないことに気づいていた。(邦訳書(2020), 19-20頁)

ここでシュンペーターは、静学理論と定常過程とを異なる性質をもつものと捉えていることが肝要である¹²⁾。一方の静学理論とは、「均衡条件についての言明と、小さい攪乱をうけた後で均衡が再び確立されていく仕方についての言明」(邦訳書(2020), 20頁)からなる理論であって、これは「たとえ現実の状態が不均衡であるとしても、あらゆるタイプの現実の分析に際して役に立つ」(同上)とされている。他方の定常過程とは、「それ自体のなかにある要因によって現実に変化することのない、時とともに流れをなしているが一定比率の実質所得を再生産していくだけの過程」(同上)のことであるとされる。一見、両者が分析対象とする範囲は、大部分が重なり合うように見えるが、集合論の記号やベン図によって簡便に表すことができないような性質の相違があるようにも思われる。両者の最も大きな違いは、静学理論が均衡状態の条件とたとえそこから外れたとしても再確立される均衡状態を記述する「道具」と認識されているのに対し、定常過程の方は、「時とともに流れをなしている」明確な時間軸を伴う「過程」と認識されているところにある。前者は、シュンペーターが最大限の賛辞をもって道具主義的に受容したワルラスの一般均衡理論をそのものである。これに対して後者は、シュンペーターが自身の主目的たる動学理論の構築にあたって、その土台となる理論とすべく独自に解釈しなおしたものであると考えられる。それは次のような記述から推論できるように思われる。

彼〔ワルラス〕の言いたかったことは、経済生活は本質的に受動的で、

それに加えられる自然的、社会的影響に自らを適応させるだけであり、定常過程の理論が理論経済学の全体をなすということだけである。(邦訳書(2020), 20頁; 強調は筆者)

経済システムを一つの均衡から別の均衡へと推進する要因をもつば外的な要因に求めるのではなく、経済変化に関する純粋な意味での経済理論が存在しなければならない。私が作り上げたかったのは、このタイプの理論である。……ワルラスやマーシャルによる理論装置では、それはこれまで十分にできなかつた。(同上; 強調は筆者)

さらに後の著作では、次のように、さらに明確に述べられている。

レオン・ワルラスは経済体系の要素間に成立する関係を方程式に組立て、それらの方程式が変数のただ一つの値を決定するのに充分なものであることを示した。かれの証明は技術と細部の点では改められるべき多くの余地を残しているが、その後の分析はその原理を依然としてもちつづけている。(Schumpeter (1939), 邦訳書I 65頁)

ワルラスの著作は、経済学の最も一般的な真理を明らかにし、経済学の最も基本的な問題を解決している。そのやりかたは、大いに改善の余地を残しており、今日すでにその後の研究やより強力な方法の影響を受けてしまっているとはいえ、永久に古典的なものとみなさなければならない。(Schumpeter (1982), 邦訳25頁; 強調は筆者)

このように、シュンペーターがワルラスへの傾倒に関して直接言及した箇所を注意深く見ると、ワルラスの一般均衡理論は、そのままの形では受容されていないことがわかる。したがって、シュンペーターが動学理論の基礎と考えていた「経済変化に関する純粋な意味での経済理論」は、ワルラスの一般均衡理論の「改善の余地」を克服することによって、シュンペーター自身が構築したものであるはずである。

II. 3 中山伊知郎の「純粋経済学」

ボン大学時代のシュンペーターに直接師事した中山伊知郎は、シュンペーターの改善に沿った形で理解し直したワルラス的な一般均衡理論を、「純粋経済学」と位置づけている。中山によると、純粋経済学とは、経済現象の均衡状態を理解する際に、均衡理論によって論理的に貫徹されているような経済学体系のことである¹³⁾。ここで注意すべきは、均衡状態と均衡理論の関係である。前者は、経済現象を形成している各要素が、一定の相互依存関係を保持しつつ、総体として見れば変動への傾向を示さない状態のことである。あるいは、内部の詳細においては変動を伴いながらも、相互依存関係の中でさまざまな変動が吸収あるいは相殺されることによって、全体としては大きな変動が生じていないように見える状態のことである。これに対して後者は、均衡状態を説明する論理を提供する理論的道具である。これは、均衡状態という諸要素間の終局的な姿を示すことにより、現実の経済現象の位置を見極めるための理論的道具である。したがって、シュンペーターが動学理論の構築という目的に合わせて改善したワルラス的な純粋経済学とは、内部に諸要素個別の変動をはらみながらも、一定のバランスのとれた状態を理論的に記述するための道具であると理解するのが妥当であろう。

まず第一にわれわれが静態と動態との区別をもって単に相対的に区別するにすぎず、それらは共に均衡理論を基礎として成立するものであると見ることはなによりも均衡理論の手段性を表現するものとして重要である。すなわち均衡理論の、理論としての第一の意義は、経済現象を理解するための手段、あるいは経済現象を分析するための要具であって、この意味においてはそれのいわゆる静態における応用といわゆる動態における応用とは決して理論の本質を変えるものではない。(中山(1972)、9頁；強調は筆者)

この引用文から、中山が提示した純粋経済学は、静態均衡理論（経済循環論）と動態均衡理論（経済発展論）の両者を包含する経済理論であると考え

られる¹⁴⁾。そうであるならば、一方の経済静態論は、経済現象を生起させる諸要素間の相関関係を均衡状態において把握するための理論であり、他方の経済動態論は、その内部から生じる経済現象の変化を通じた均衡状態の時間的遷移を通じて、諸要素間の相関関係の変化を捉えるための理論であるということになろう。とりわけ、動態均衡理論というパラドキシカルな表現を用いたところに、純粋経済学を動学理論の基礎にも据えようとしたシュンペーター的な特徴が表れているように思われる。

本節では、シュンペーターが³⁾、ワルラスの一般均衡理論を賞賛しながらその限界——それは動学理論の基礎に据えるという目的にとっての限界である——を改善し、時間の流れの中における定常過程の理論を構築したことを確認した。これを踏まえて、特に『景気循環論』(1939年)で完成された、資本主義過程の循環過程を捉えるための定常過程の理論と発展過程の理論との「化学」的融合の方法と内容の検討が³⁾、次の課題となる。

Ⅲ 定常過程と発展過程の相互連環としての景気循環

『景気循環論』(1939年)は、その副題が表す通り、「資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析」を目的とした大著である。同書は、『理論経済学の本質と主要内容』(1908年)から『経済発展の理論』(初版1912年)およびその改訂を踏まえて、いわばシュンペーターの経済理論体系の完成形が示されたと考えてよいだろう。したがって、定常過程の理論と発展過程の理論との密接な相互連環を検討するための素材とすべきは、『景気循環論』ということになる。

Ⅲ. 1 『景気循環論』に対するS. クズネッツの書評をめぐって

『景気循環論』は、シュンペーターが理論と歴史と統計の三つの研究領域を結びつけて資本主義過程の分析を試みた野心的な大著でありながら、刊行直後の書評は、必ずしもシュンペーターの期待したものではなかったように思われる¹⁵⁾。そのような書評のうち、最も本質的なものはKuznets (1940)であろう。

S. クズネッツは、全米経済研究所 (National Bureau of Economic Research: NBER) の創始者であり、アメリカ制度学派の主要論者の一人でもあるW.

ミッチェルに師事し、シュンペーターの死後、1960年からハーバード大学の教授となり、1971年には経済成長に関する理論を実証的方法を用いて構築した功績に対してノーベル賞を受賞した。ただし、クズネッツは独自の理論を構築したというよりは、データを集め、統計的分類を構築し、それらの分類が時間を通じてどのように遷移するかを観察した成果を多数あげたことから、終始ミッチェルの門下生であったと言える。

景気循環の諸理論のなかで、シュンペーターの理論とミッチェルのそれは、従来からしばしば対比されてきた。両者の違いは、シュンペーター理論が、ワルラスの一般均衡理論を独自に解釈し直した定常過程の理論から演繹的に構築された理論モデルであるのに対し、ミッチェル理論は、国の総体的経済活動の実証分析から帰納的に見出された理論モデルであるという点にある。もちろんクズネッツの立場は後者の方法に依拠するものであり、そのようなシュンペーターとは異なる方法論的立場から『景気循環論』に対する書評は執筆されたのである。クズネッツによる本質的批判は、概ね理論的分析と統計的分析との関係の一点に向けられていると考えてよい¹⁶⁾。それを端的に表しているのが、次の箇所である。

シュンペーター教授の現在の理論的モデルは、統計的に観察された現実と直接かつ明確に結びつけることはできないということ、そしてこの著書における統計的分析の極端な欠如は、採用された理論的モデルの型から生じる避けられない結果であるということ、さらに歴史的概観と質的議論へのかなりの依存は、理論的モデルに一致するであろう統計的仮定を工夫することの困難さから起こる結果であるということ——これらの印象から逃れることはできない。(Kuznets (1940), 邦訳書36頁)

この総括的な引用文から、クズネッツの理論的分析と統計的分析との関係に対する批判として、次の二点を指摘することができるだろう。第一は、定常過程に関する演繹的命題から導出した理論モデルから出発して、それを証明や量的データによって分析結果を提示するような、「理論から統計へ」という全体としての演繹的アプローチに対する批判である。ここには、ミッチェ

ルの門下生としてその帰納的発想に忠実であったクズネッツの立場が表れているように思われる。そして第二は、一つの抽象ではあるが単に恣意的なものではなく、直接に現実の観察から得られるとされた定常過程の理論を、膨大な歴史的・分析的の提示によって関連づけようとしたシュンペーターの「理論的歴史¹⁷⁾」は、歴史や制度の質的な性格から生じる量的な統計的分析と融合させるのに限界があることである。ここで、アメリカ制度学派の主要論者の一人に挙げられるミッチェルの影響を受けたクズネッツが、歴史や制度の質的側面に着目すること自体を否定しているわけではないことを見逃すべきではない。それを論証するための統計データの収集方法や加工技術さえあれば、シュンペーターの野心的試みは一定の重要な成果をあげていたはずであろう。クズネッツの次の記述は、シュンペーターに対する敬意の表れであるように思われる。

しかしながら、本書はこのようにいろいろな疑問を呼びおこし、景気循環の研究と基本的な長期的動向の研究とを関連させることの重要性を強調し、企業者活動の率と速さを決定する要因を強調することを求め、明確、簡明な景気循環の概念に基づいた統計的手続きを要求し、歴史上の証拠を使用することを勇敢にも試みている。これらはみな本書の主要な長所である。(前掲書、邦訳書43頁)

このように考えると、一方で、シュンペーターの経済理論体系は、歴史的・制度的観察を融合させて構成しようとしたものであったが、そこから得られる演繹的命題を統計的分析とさらに融合させるところに大きな難点があったことから、『景気循環論』の副題で表明されたような、資本主義過程の三位一体的分析は失敗に終わった。他方で、クズネッツの量的な統計データを用いた実証分析と統計的分類の観察は、20世紀後半以降のマクロ経済学のミクロ的基礎づけという経済理論研究の展開において、それに適合するような理論的枠組みを提供できなかった。ここに、両者の功績が歴史的・制度的視点を介して補完し合う可能性を見出すことが可能であり、シュンペーターが『景気循環論』で試みた大きな野心は、いま一度思い出されるべきであるように思われる¹⁸⁾。

Ⅲ. 2 定常過程と発展過程の相互連関

『景気循環論』の理論的分析は第2章から第4章で展開されている。それは『景気循環論』に先行する二つの主著を統合し整理要約した内容となっている。

まず、時間を通じた資本主義過程を分析するために、理論の出発点に置かれるのは定常過程の理論である。この純粋理論モデルは、次のような諸前提を満たすものとして設定される。すなわち、①各企業はすべて完全に競争的な均衡状態にある、②各企業の費用は賃金と地代からなり、各企業の収入とちょうど等しい、③価格はつねに平均費用と等しい、④したがって、利潤はゼロで利潤機会は存在しない、⑤利率もゼロである、⑥資源の非自発的未利用は存在しない、⑦各企業と同様に各家計もすべて、完全に長期均衡の状態にある、⑧収入と支出は等しく、予算の様式を現行の状況下では有利に変更することができない¹⁹⁾。

この純粋理論モデルを単に状態の記述ではなく、時間を通じた過程の理論として理解するためには、このような状態が時間を通じて繰り返されなければならない。いわばマルクスの単純再生産と同様に、ある状態が每期每期同じ規模で再生産されていくような過程である。ただ、両者の違いは、マルクスの単純再生産は、社会全体のマクロ的な再生産過程を対象としているのに対し、シュンペーターの定常過程の理論は、個々の経済主体が過去の実績や経験に基づいて確実な予測のもとで意思決定できるというミクロ的な経済主体の行動の観点から、総体的な結果が生じると捉えられているところにある。このような、ミクロ的な経済主体の観点から景気変動の理論を捉えようとするシュンペーターの視点は、『経済発展の理論（初版）』（1912年）第6章——同章の内容は、その改訂第2版において大きく書き換えられている——において、最も明確に展開されているように思われる。また、このような視点を採ったことによって、シュンペーターは、企業者による新結合の遂行という核心的議論を、定常過程の理論を土台として展開することが可能になったように思われる。

次に、定常過程の理論に、新たな購買力である銀行信用を後ろ盾として、企業者や革新企業によって新結合が遂行される。それらが必要とする生産財や生産用役は、より高い要素価格で従来の定常過程から引き抜かれるため、

諸価格の上昇、利子率の上昇、そして所得の増加がもたらされる。新結合の遂行当初は、生産関数は不変であることから、企業者や革新企業は企業者利潤を獲得し、そこから費用や利子の支払いが順調に行われ、デフレ現象が生じることになる。さらに、最初の革新実行者の成功実績を根拠として、予測不可能性の不安が相対的に払拭された模倣者が群生的に追随し、企業者利潤は平準化されていく。このように、いったん定常過程からの逸脱が増幅すると、利潤を求めた新しい計画策定が困難になり、経営に失敗する可能性が増大することになる。

最後に、新たな革新的投資が鈍化することにより、定常過程からの逸脱は停止し、新たな生産関数のもとの生産に適応していく過程が始まる。これが、シュンペーターの言う「整理過程」としての景気後退局面である。この適応過程を通じて、新結合の遂行により変更された与件に適合するように経済や事業の再組織化が行われ、それを通じて生産や事業に関する予測可能性が高まっていきながら、資本主義過程は新たな定常過程に接近していくことになる。以前の定常過程との違いは、生産関数が別のものになったこと、生産物が増大し貨幣所得が増大したこと、そして債務の清算によって利子率が低下したことである。

この定常過程と発展過程の交替を通じた景気循環のプロセスは、マルクスとの対比で指摘したように、経済主体の計画や行動の観点から観察することができる。それを『経済発展の理論 (初版)』第6章に依拠して見ておきたい。まず、定常過程と発展過程それぞれにおける経済主体の意思決定に関して、

静態的経済は規則的な繰り返しなので、所与の判断資料がすべて経験上与えられている。……この経済過程と私たちの考える経済発展とが本質的に異なっているのは、私たちの場合、経済計画上の諸点が経験上与えられるわけではなく、見積もらなければならないからである。

(Schumpeter (1912), 邦訳書404-05頁)

とした上で、以前の定常過程と新たな定常過程とを、企業者の意思決定の観点から比較すると、

この均衡状態こそが、企業者が到達したいと思い、企業者の計算の目標になり、場合によっては今後の計画の基礎となるべきものである。これらの攪乱要因は、発展によって引き起こされた攪乱要因が静態的経済に影響を及ぼすのと同様な仕方です、新しい事業にも影響し、企業者の側に同じような防御や適応の試みをもたらす。企業者たちは今度は、「利潤と損失」の梃子の圧力のもと、その時点で与えられた状況にできるだけうまく合わせ、最も有利な可能性のある位置を見つけるように努め、もともと目指していた均衡状態とは異なる状態を目指して努力する。……企業者がその時点で目指しているこうした均衡状態は、静態経済的な経済主体が作り出そうとしている状態と同じである。(同上、邦訳書408頁)

ということになる。そして、個々の経済主体の意思決定の相互依存関係からもたらされる経済全体の発展は、次のように捉えることができるのである。

私たちの考える意味での国民経済的な発展は、単にさまざまな企業活動の独立した個々の発展から成り立っているわけではないという認識に到達する。……一つの個別的発展が他の発展を引き起こすといったやり方で、部分的発展が共鳴しながら相次いで起こるということである。(同上、邦訳書398頁)

以上が、最もシンプルな二局面循環図式の過程である。個々の経済主体の経験と実績に基づく確定的な行動から展開される定常過程の理論をベースとして、そこに企業者が企業家精神を発揮して新結合を遂行すると、定常過程から逸脱した発展過程に突入する。しかし、この逸脱はその過程内で行動する経済諸主体の予測可能性を著しく低下させることから、発展過程の進行は逸脱が止まって反転し、新たな定常過程に向けた適応過程に移行することになる。この発展過程の後半に位置づけられる適応過程において初めて、次の新たな定常過程を仮定することが理論的に可能になるのである。

Ⅲ. 3 「均衡の近傍」の理論的意義

それでは、最後に定常過程に大きく関連する「均衡の近傍」について、その理論的意義を検討しておきたい。本論文ではここまで一貫して、シュンペーターの静学理論（静態論）を、定常過程の理論と表記してきた。シュンペーターがワルラスの一般均衡理論をそのままの形で自身の経済理論体系に導入したのではなく、改善を施したことを強調する意図で、一般均衡理論あるいは均衡理論の表記をあえて避けてきた。シュンペーターにもそのような意図があったと感じさせる概念が、この「均衡の近傍」である。

シュンペーターの説明によると、この概念は次のような意味をもつものである。

われわれの目的のために、体系が、もし到達されれば均衡条件を充たすという状態に近づく、時間尺度上の不連続点でだけ、均衡の存在を認めることとしよう。また実際の体系は事実上このような状態に決して近づくものではないから、均衡点を考察する代わりに、均衡区域——その中では全体としての体系がこの区域の外でよりもずっと均衡している——を、考察するだろう。適切に修正された均衡的考察をやっていく作業形式であるこのような区域を均衡の近傍と名づける（ただしこの言葉は数学的意味に解されてはならない）。(Schumpeter (1939), 邦訳書 I 102頁；強調は筆者)

すなわち、この概念は、ある一つの地点ではなくその周辺を含めた地帯あるいは区域として均衡概念を把握するための表現上の工夫であると言える。したがって、厳密な意味で均衡点は存在しないが、均衡へ向かう傾向や接近していく傾向は間違いなく存在していると考えられているのである。このことは、定常過程における経済主体の実際的な行動からも言えることである。

注目すべき重要なことといえば、事業家たちが現実には、実際の状況をいつもこの種の正常態と比較するということだけである。（前掲書，邦訳書 I 3頁；強調は筆者）

マ・ー・シヤルの正常値を、われわれは要素の理論的規範とよぶ。そしてすべての要素がその理論的規範に一致するような体系の状態は、たとえ現実生活からどれほどかけはなれていようと、正常な景気状況という概念が事業家にはたしていると同じ役目を理論家にたいしてはたすのである。(同上、邦訳書 I 64頁；強調は筆者)

短期的な意味でも、長期的な意味でも、不決定的な状況におかれている企業は価格と産出高にある幅をもたせてでなければ決して計画できないという事実からの結果である。(同上、邦訳書 I 90頁；強調は筆者)

このように、定常過程を均衡の近傍の範囲内にある過程と捉えるなら、その過程で行動する経済主体にとっては、均衡の近傍とは、入手可能な統計データの一定の幅をもった正常値の範囲ということになるということである。この範囲に収まることをもって、経済主体にとっては意思決定における予測可能性が確保されることになる。このような「均衡の近傍」概念を提出したシュンペーターは、上述したクズネツツの統計分析との補完関係に、接近しているように思われる。

それでは、ゆらぎの可能性を含んだ正常値の範囲を、われわれはどのように決めればよいただろうか。「正常」とは相対性の意味合いの強い概念であると考えられるため、その範囲を正確に決定することは困難であろう。しかし、先のNBERの創設者ミッチェルとも大きく関連して、現代における景気判断の方法を見ると、シュンペーターの均衡の近傍あるいは定常過程と、必ずしも無関係ではないような側面があるように思われる。例えば、公的機関が公表している景気動向指数のような統計的・実証的研究においては、景気の高と谷の日付をエビデンスに基づいて判断し景気循環の局面を区分する手法が採られており、それ自体はきわめて適切かつ妥当な方法であるといえる。しかし、比較的最近から調査されるようになったいわゆる景況感のような指標においては²⁰⁾、景気が上向きか下向きかだけでなく、「横ばい」という判断も使用されている。景気が横ばいであるという感覚的状况は、明らかな上昇局面でも下降局面でもない景気的局面であると考えられることから、一定の定

常的な景気循環の局面を理論的に位置づける必要があるだろう。このような定常的局面を把握するにあたって、シュンペーターの定常過程や均衡の近傍は、再検討されるべき概念的道具であるように思われる。

IV まとめ

シュンペーターの経済理論体系は、経済静学、経済動学、経済社会学の三本柱から構成され、特に、経済静学と経済動学は、『理論経済学の本質と主要内容』(1908年)と『経済発展の理論』(1912年)およびその改訂を経て、『景気循環論』(1939年)において完成されたと考えてよい。塩野谷(1995)は、「彼[シュンペーター]は静態理論を動態的な現実を説明できないものとして批判の対象として取り上げているにすぎず、また彼が経済発展理論の展開に当たって定常循環の分析から始めたのは、あくまでも動態過程を際立たせるための逆説的な工夫である」(88頁)という通説に対して、異議を唱えている。本論文ではこれまでの考察を踏まえて、塩野谷の異議を支持する。

シュンペーターが均衡概念と明確に区別して用いた定常過程は、ワルラスの一般均衡が、時間を通じて、毎年不変の規模で再生産されていくような経済状態の過程であると定義される。この定義は、ワルラスの一般均衡概念と厳密に一致するものではない。時にシュンペーターはワルラスを誤解したとみなされることもあるが²¹⁾、シュンペーターの定義の大きな特徴は、時間概念を明示的に導入したところにあり、ある理論的な一時点における均衡状態を厳密に表すというよりも、そのような状態が多少のゆらぎを伴いながら、ほぼ同じ規模の状態に継続されるような過程を捉えているところにある。このようなシュンペーターの定義は、ワルラスの一般均衡体系というより、むしろマルクスの単純再生産表式に比肩するものとされることもあるが、両者の違いは定常過程あるいは単純再生産において、過程内で行動する経済主体を念頭に置いているか否かにある。シュンペーターはそれを明示的に含んでいたことから、定常過程の理論と発展過程との相互連関の中に企業者の役割を据えることができたのである。定常過程の理論はシュンペーターの経済理論体系に不可欠な「道具」なのである。

注

- 1) Louçã (1997)では、Allen (1991)で言及されたシュンペーターの生涯における様々なパラドキシカルな側面に依拠しながら、ワルラスの一般均衡理論に対するパラドキシカルな受容姿勢のことを、特に「シュンペーターのパラドックス」と呼んでいる。
- 2) これがシュンペーター自身によって最も明確に言及されているのがSchumpeter (1937)である。
- 3) McCraw (2007), 邦訳書595頁。ここでは、シュンペーターにとって生涯の研究テーマが貨幣と景気循環の分析であったことが指摘されている。
- 4) シュンペーターの研究は、ウィーン大学において法制史・社会史を経済的観点から考察する歴史研究から始まり、次にオーストリア学派の経済理論を経て、ワルラス、パレート、エッジワースら数理学派の研究へ向かったと言われている(塩野谷(1998), 83頁)。
- 5) シュンペーターによると、ドイツ歴史学派はG. シュモラーによって初めて学派として確立され、その基本的観点として、①社会生活の統一性、②発展の観点、③有機的・全体的観点、④人間動機の多元性、⑤事象の一般的性質よりも具体的・個別的関連に対する関心、⑥普遍妥当な認識よりも歴史的相対性に対する関心、以上の六点を挙げている(Schumpeter (1954), 邦訳書319-26頁)。
- 6) 道具主義は、M. フリードマンを代表とする「強い道具主義」と、シュンペーターのような「弱い道具主義」に分類できるとされる(塩野谷(1998), 第2章; 同(1995), 第5章)。前者は、理論の役割を観察結果の予測に限定し、理論を予測の道具として厳密に考える立場である。
- 7) シュンペーターが構想した経済学研究に関する壮大なヴィジョンを「総合的社会科学」と呼び、その構造を詳細に考察した先行研究として、特に塩野谷(1998)の第三章を参照のこと。
- 8) Schumpeter (1954), 邦訳書(上) 21-22頁。
- 9) これはハーバラーによるシュンペーターの追悼論文にある表現である。シュンペーターは師の一人であるベーム＝バヴェルクに関する伝記評論でこの表現を用いたが、これを自説として繰り返していたという(Harris ed. (1951), 邦訳書84頁)。
- 10) Walras (1926), 邦訳書「第四版への序」。
- 11) 本項目では、Schumpeter (1937)からの引用に関して、Schumpeter (1912)の邦訳書(2020)に拠ることとし、「邦訳書(2020), 頁」と表記することにする。
- 12) ワルラス一般均衡理論に対するシュンペーターの理解を、「過程的」理解と捉える見解に関しては、八木(1988)の第6章を参照のこと。そこでは、さらにこの「過程的」理解の分析レベルに関して、「個別的な過程」、「一つの総過程」、「大きな経済的・社会的過程」の三段階で把握すべきであると主張されている。
- 13) 中山(1972), 6頁。
- 14) 中山では、「そのときどきに存在する現実の経済の状態は、常にこれを純粋の均衡

- 状態への傾向と、この状態を変動せしめる傾向との混合と見ることができる」(同上書, 88頁)と表現されている。
- 15) ここで取り上げるクズネッツの書評の他に、例えば、Rosenberg (1940), Lange (1940), Hansen (1951) などが³ある。
 - 16) これに関して、クズネッツは次の四つの欠陥を指摘している。①シュンペーターは正しい量的分析と考えていたものに取り組みなかつたのではなく、その代わりに統計の収集とその他の歴史的観察を通じた個人的な旅(「知的日記」)に取り組んだ。②シュンペーターの理論モデルは統計的にテストしうる仮説を生み出していない。③景気循環における人口と関連するイノベーションの「群生」を通じた企業家能力のかなり不均等な配分に関するシュンペーターの仮説は、さらなる証拠なしには高度に疑い深いものである。④シュンペーターによって示された、3種類の景気の波とそれらの間の関係は、提供された証拠によっても、彼が気づいていたその他のどのような証拠によっても支持されない。
 - 17) 金指 (1979), 135頁。
 - 18) 現代の進化経済学では、このような視点からシュンペーターの経済進化のヴィジョンを展開しようという研究がある。例えばFoster (2000), 同 (2015), Freeman (2015)などを参照のこと。また、Kingston (2006)とAndersen (2006)で展開された論争からもこのような動向の一端を垣間見ることができる。
 - 19) Clemence and Doody (1950), 邦訳書第2章を参照のこと。
 - 20) 例えば、2000年以来内閣府が毎月調査し公表している「景気ウォッチャー調査」や、民間の信用調査会社の帝国データバンクが発表している「TDB景気動向調査」、また日本銀行による「日銀短観」などがある。
 - 21) たとえば森岡 (2000)を参照のこと。

参考文献

- Allen, R. (1991) *Opening Doors: The Life and Work of Joseph Schumpeter*, New Brunswick: Translation Publishers, 2 vol.
- Andersen, E.S. (2006) "The Limits of Schumpeter's Business Cycles," *Industry and Innovation*, Vol. 13, No. 1, pp. 107-16.
- Clemence, R.V. and F.S. Doody (1950) *The Schumpeterian System*, Addison-Wesley Press. (邦訳) 伊達邦春監訳 (1956) 『シュムペーター経済学入門』ダイヤモンド社
- Foster, J. (2015) "Joseph Schumpeter and Simon Kuznets: Comparing Their Evolutionary Economic Approaches to Business Cycles and Economic Growth," *Journal of Evolutionary Economics*, Vol. 25, pp. 163-72.
- Freeman, C. (2015) "Schumpeter's 'Business Cycles' Revisited," *European Journal of Economic and Social Systems*, No. 1-2, pp. 47-67.
- Hansen, A.H. (1951) "Schumpeter's Contribution to Business Cycle Theory," *The Review of*

- Economics and Statistics*, Vol. 33, No. 2, pp. 129-32.
- Harris, S.E., ed. (1951) *Schumpeter: Social Scientist*, Harvard University Press. (邦訳) 中山伊知郎・東畑精一監訳, 坂本二郎訳 (1955) 『社会学者シュムペーター』東洋経済新報社
- Kingston, W. (2006) “Schumpeter, Business Cycles and Co-evolution,” *Industry and Innovation*, Vol. 13, No. 1, pp. 97-106.
- Kuznets, S. (1940) “Schumpeter’s Business Cycles,” *American Economic Review*, Vol. XXX, pp. 257-71. (邦訳) テイラー, O.H. 他著, 金指基編訳 (1978) 『シュムペーター経済学の体系』学文社, 24-45頁
- Lange, O. (1941) “Business Cycles: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process by Joseph A. Schumpeter,” *The Review of Economics and Statistics*, Vol. 23, No. 4, pp. 190-93.
- Louçã, F. (1997) *Turbulence in Economics*, Edward Elgar.
- McCraw, T.K. (2007) *Prophet of Innovation*, Harvard University Press. (邦訳) 八木紀一郎監訳・田村勝省訳 (2010) 『シュンペーター伝』一灯舎
- Rosenberg, H. (1940) “Book Review: Business Cycles: A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process by Joseph Schumpeter,” *The American Historical Review*, Vol. 46, No. 1, pp. 96-99.
- Rosenberg, N. (1994) “Joseph Schumpeter: Radical Economist,” in Shionoya, Y. and M. Perlman eds., *Schumpeter in the History of Ideas*, University of Michigan Press, pp. 41-57.
- Schumpeter, J.A. (1908) *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Duncker & Humblot. (邦訳) 大野忠男・木村健康・安井琢磨訳 (1983) 『理論経済学の本質と主要内容 (上・下)』岩波文庫
- Schumpeter, J.A. (1912) *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig: Duncker & Humblot. (邦訳) 八木紀一郎・荒木詳二訳 (2020) 『シュンペーター経済発展の理論 (初版)』日本経済新聞出版社
- Schumpeter, J.A. (1926) *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 2nd revised edition, Duncker & Humblot. (邦訳) 東畑精一・中山伊知郎・塩野谷祐一訳 (1976-77) 『経済発展の理論 (上・下)』岩波文庫
- Schumpeter, J.A. (1937) “Preface to Japanese Edition of ‘*Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*,’” in Clemence, R.V. ed. (2006) *Essays*, Transaction Publishers.
- Schumpeter, J.A. (1939) *Business Cycles*, 2 Vols., New York: McGraw-Hill Book Co. (邦訳) 吉田昇三監修・金融経済研究所訳 (1958-64) 『景気循環』(I-V), 有斐閣
- Schumpeter, J.A. (1950) *Capitalism, Socialism, and Democracy*, 3rd edition, Harper & Brothers. (邦訳) 中山伊知郎・東畑精一訳 (1995) 『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社
- Schumpeter, J.A. (1951) *Ten Great Economists*, George Allen & Unwin Ltd. (邦訳) 中山伊知

- 郎・東畑精一監修 (1952) 『十大経済学者』日本評論新社
- Schumpeter, J.A. (1954) *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by E.B. Schumpeter, George Allen & Unwin; Oxford University Press. (邦訳) 東畑精一・福岡正夫訳 (2005-06) 『経済分析の歴史』(上・中・下), 岩波書店
- Schumpeter, J.A. (1982) “The ‘Crisis’ in Economics: Fifty Years Ago,” *Journal of Economic Literature*, Vol. 20, No. 3, pp. 1049-59. (邦訳) 杉山忠平訳 (1983) 『経済学の『危機』』『別冊経済セミナー：シュンペーター再発見』日本評論社, 17-26頁
- Schumpeter, J.A. (2006) *Essays*, edited by R.V. Clemence, Transaction Publishers.
- Walras, L. (1926) *Éléments d'économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale*, Paris et Lausanne. (邦訳) 久武雅夫訳 (1983) 『純粹経済学要論』岩波書店
- 金指基 (1979) 『J・A・シュムペーターの経済学』新評論
- 金指基 (1987) 『シュンペーター研究』日本評論社
- 塩野谷祐一 (1995) 『シュンペーター的思考』東洋経済新報社
- 塩野谷祐一 (1998) 『シュンペーターの経済観』岩波書店
- 伊達邦春 (1992) 『シュンペーター・企業行動・経済変動』早稲田大学出版部
- 中山伊知郎 (1972) 『中山伊知郎全集第1集：純粹経済学の拡充』講談社
- 森岡真史 (2000) 「進化における定常性」進化経済学会・塩沢由典編『方法としての進化』シュプリンガー・フェアラーク東京, 第5章
- 八木紀一郎 (1988) 『オーストリア経済思想史研究』名古屋大学出版会
- 八木紀一郎 (2004) 『ウィーンの経済思想』ミネルヴァ書房